



認知症疾患医療センター

センター通信

【認知症の幻覚・妄想について】

赤間 史明 医師

精神保健指定医、日本精神神経学会専門医・指導医、日本児童青年精神医学会認定医・評議員、子どものこころ専門医

今回、認知症の幻覚・妄想についてお話します。

認知症はもの忘れなどの記憶障害と時間や場所がわからなくなる見当識障害が中核症状と言われていますが、幻覚や妄想などの精神症状を呈することも多く、生活の妨げになることが多いとされています。特に、アルツハイマー型認知症の患者さんは3人に1人、レビー小体型認知症の患者さんは半数以上に幻覚・妄想を呈するとされており、本人自身や介護者の生活の質を低下させ、身体や生活の機能低下を加速させ、自宅で介護していくことが困難になり、入院や入所の直接的な原因にもなってしまいます。

幻覚・妄想の精神症状は、認知症のタイプにより特徴的な症状が出現することがあり、代表的な症状として、**アルツハイマー型認知症**は、「財布を盗られた」など、**もの盗られ妄想**や「泥棒に入られる」など**被害妄想**、「夫や妻が浮気をしている」など**嫉妬妄想**が挙げられます。これらの妄想は家族や近所の方に向けられることも多く、家庭内や近所内のトラブルに発展することも多く認めます。

次に、**脳血管性認知症**は、障害される部位によって変化し、後頭葉が障害されると**幻視**、前頭葉の障害にて**幻臭**を呈することがあります。また、**せん妄**を呈し、夜間に不穏となり幻視や妄想を認めることもあります。

レビー小体型認知症では、**幻覚や妄想**の頻度が高く、特に、「亡くなった家族が立っている」などの人物幻視や「虫が飛んでいる」など小動物幻視を多く認めることがあります。また、アルツハイマー型認知症のような妄想を呈することもあり、特に**嫉妬妄想**が多いとされます。

幻覚・妄想に対する家族の対応として、本人は幻覚や妄想が現実のものと信じているため、病識がないことが多いです。

そのため、**本人の幻覚や妄想を頭から否定**

すると、より混乱や悲しみ、時には怒りを向けることもあり、さらに幻覚や妄想が悪化する原因となることがあります。否定せずに、**話を聞き、時に話題を変えたりすることも必要です。**

「財布を盗られた」ともの盗られ妄想を認める際には、財布のある場所を家族が把握して、その都度、一緒に確認してあげることも有効です。また、「夫や妻が浮気をしている」などの嫉妬妄想を認める際には、**見捨てられるような不安から妄想に発展している場合もあり、配偶者が時折、一緒に出かけてあげることも有効な場合があります。**しかし、妄想や幻覚などで家族内や近所内でトラブルになる場合、また興奮などで対応が難しい場合には、専門機関での薬物療法なども有効です。

このように認知症の幻覚・妄想は、本人や介護者の苦痛を伴い、生活の質を下げてしまうため、それぞれの症状に合わせた治療が必要であり、早期から専門的な治療が必要であります。しかし、本人自身は病識がなく治療を拒否することも多く、なかなか医療に繋がりにくく、また、介護者も家庭の問題として誰にも相談できずに抱えてしまうことも多いです。当院では、認知症の診療連携拠点病院として認定看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカーなどがチームとして活動しておりますので、ご相談頂けたらと思います。





活動報告

10/28 認知症研修会

木曽病院認知症疾患医療センター様と共催し「パーキンソン症候群と認知症」というテーマで研修会を行いました。

全ての事に言える事ではありませんが、早期発見、早期介入の大切さを改めて学ぶ事ができました。

10/28 地域連携会議

例年通りに地域の方々と認知症と認知症疾患医療センターを取り巻く状況について意見交換を行いました。

今回は特にチームオレンジについて御意見が多かったですが、それに限らず今後も地域との連携、木曽病院様との連携がますます大切になってくると再認識しました。

睡眠の効果

◎認知症の家族と一緒に暮らす上

で重要なことは・・・

『生活リズムの見直し』



夜、寝れていますか？

近年、家族の中に認知症の方がいらっしゃることは、稀ではなくなってきており、家族の介護負担の増加が指摘されています。特に、本人と家族の睡眠や生活リズムのズレが問題となっています。

とある調査では、在宅で家族と一緒に過ごしている認知症の方の、“約7割”が何らかの睡眠障害があるという報告をしています。認知症にもいくつか種類がありますが、共通するものとして、不規則な睡眠/覚醒のリズムによって、昼間に眠ってしまい、夜に眠れないということが挙げられます。認知症の進行に伴って、睡眠だけでなく、覚醒を維持する能力も落ちてしまうためです。



これに合わせて、家族の睡眠/覚醒のリズムも影響されることによって、心身のストレスや介護負担の増大につながってしまっています。

まずは、認知症の方の睡眠時間や、起きていられる時間、1日のスケジュールを見直すことから、始めてみましょう。

昼間の間ずっと椅子に座っているだけでは、中途半端な覚醒となり、寝てる状態に近いため、夜起きてしまうことがあります。かといって、昼間もずっと寝ていては、夜眠ることができず、起きてきてしまいます。



重要なことは『睡眠』と『覚醒』に

メリハリをつけて過ごす、ということです。

ご飯を食べるとき、トイレに行くとき、好きなTV番組がやるときなど、必要な時に覚醒していられるように、布団に横になって、しっかり休憩する時間を設けることが大事です。それにより、認知症の方の睡眠/覚醒のリズムが整うことで、家族の生活リズムも落ち着き、ストレスや負担が減ってくることでしょう。



作業療法士 伊藤 涼